関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

個の標識としての英語不定冠詞

著者	織田 稔
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	2
ページ	1-14
発行年	2001-09
その他のタイトル	The Indefinite Article as a Category Marker of Individuality
URL	http://hdl.handle.net/10112/1228

研究論文

個の標識としての英語不定冠詞

The Indefinite Article as a Category Marker of Individuality

織　田　　稔
ODA Minoru

Japanese makes no number distinction in the use of nouns and thus it has no article system, either. This explains why Japanese learners of English do so often stumble in the usage of the indefinite article. They never learn the semantic significance it is given in the language and never understand what cognitive basis it is founded on. The purpose of this paper is to elucidate the motive the people conceived of for discerning a new semantic category in nouns and developing a corresponding syntactic marker for it.

The main subject discussed in each section is as follows:

1. 'Chicken' vs 'a chicken'—marked indifference of Japanese to the difference
2. Names of meat—distinctions lexical as well as grammatical
3. Loss of individuality and loss of number distinctions
4. Immersed individuals or individuals dissolving into a mass
5. The great chain of being—death and rebirth of individuals
6. The making of the English indefinite article
7. The grammar people wanted to create in there
8. 'One' and 'a/an'—the same root yet different plants. How have they diverged? Counting is one thing and being countable another.

キーワード
個体性 (individuality)、不定冠詞 'a/an' (the indefinite article 'a/an')、数詞 'one' (the numeral 'one')、英語の冠詞体系 (the English article system)、名詞における数の識別 (number distinction in nouns)

1. 'chicken' と 'a chicken'

不定冠詞 a／an の本当の働きは何なのであろうか。「不定冠詞」という特別の名称まで与えられておりながら、中学・高校を通じて、いや大学でも十分な説明を聞いたことがない。「一つの、という意味ですが、特に日本語に訳さなくてよろしい」と中学１年の最初に教えてもらったきりである。日本語に訳さなくてもよいような a／an なら、どうしてそんなものをいちいち名詞につけるのか。第一、それなら数詞の one とどう違うのか。これがおおかたの日本人英語学習者の、a／an に対する印象であったと思う。

このように、「英語では book や boy のような数えることのできる名詞には、その前に a をつ

けます」というのが、われわれの英語の不定冠詞に対する理解のすべてであったから、マーク・ピーターセン氏が『日本人の英語』（岩波新書、1988）を出版したとき、爆発的な人気をもって迎えられたのも当然であった。特に冒頭の冠詞に関する数章は新鮮な驚きであったようだ。ピーターセン氏は、まず、アメリカに住む日本人の友人から送られてきた

(1) Last night, I ate a chicken in the backyard.

という文を掲げ、この文は、(時を表す副詞句 'last night' を文頭に置いていることなど、これはまさしく日本人の英語だが、)夜更けの裏庭で、口もとを血だらけにしてニワトリを一羽まるごと食べている友人の姿を描いていて秀逸であると、皮肉たっぷりに紹介し、そこから、英語の不定冠詞の有無がはたす役割りについて説明を始める。そのユーモア溢れる筆致に、ついわれわれも笑ってしまうのだが、これはわれわれにとって笑いごとではない。

そしてこの書物を読んだ学生たちは、いずれも、「名詞にaをつける」のではなく、どうしても「つける」と言うのであれば、「aに名詞をつける」のだとピーターセンが言っていることにショックを受ける。名詞に先行してまず意味的カテゴリーを決めてから、名詞を何にするか考えるのだと言っているところである。しかし私がいちばん嬉しく思ったのは、彼が 'a chicken' と 'chicken' は独自の意味をもった二つの異なる単語であると考えるほうが現実的だと、ネイティヴの立場から主張してくれたことである。事実、日本語では

(2) a. 'a chicken'「ニワトリ」
　　b. 'chicken'「かしわ」

と別の単語であった。「かしわ」は、お肉屋さんではなく、タマゴ屋さんで売られていた。ただ残念なことに、今の若い人には「かしわ」を知らない人が多く、古語になってしまったようだ。

2. 語彙と文法による個の識別

英語では多くの動物が、生きた個体のときと解体されて食肉になってしまったときで、違った単語で呼ばれている。これは、主として食肉を供するために飼育されている動物に多いのだが、このことをめぐって、ウォルター・スコットが『アイヴァンホー』の第1章で道化のウォンバに、アングロ・サクソンの農奴が育てている間は ox, swine, sheep, deer のように原住民(アングロ・サクソン)の単語を使いながら、いざ料理されて人の口にはいるときは、beef, pork, mutton, venison と支配者（フレンチ・ノーマン）の言葉で呼ばれるのは一体どういうことか、と言わせているのは有名な話である。

> . . . and so when the brute (*ie* swine) lives, and in the charge of a Saxon slave, she goes by her Saxon name; but becomes a Norman, and is called pork, when she is

carried to the Castle-hall to feast among the nobles. . . .

（そういうわけで、この動物〔ブタ〕がサクソン人の奴隷に世話されて生きている間はサクソンの名前で 'swine' と呼ばれているが、あまた貴顕を招いての饗宴のため、城館の大広間に運ばれるときにはノルマンに身を変え、'pork' と呼ばれる）

ヘンリー・ブラッドレーも *The Making of English* の中でこのエピソードに言及し、

Readers of *Ivanhoe* will remember the acute remark which Scott puts into the mouth of Wamba the jester, that while the living animals —*ox, sheep, calf, swine, deer*— continued to bear their native names, the flesh of those animals as used for food was denoted by French words, *beef, mutton, veal, pork, bacon, venison*. The point of the thing is, of course, that the 'Saxon' serf had the care of the animals when alive, but when killed they were eaten by his 'French' superiors.

と述べている（Bradley, 1904：88）。被征服民のアングロ・サクソンと征服者ノルマン人との間の関係を「ぼくら育てる人」「きみら食べる人」の関係に集約してみせているところが辛辣なのだが、われわれにとって大切なのは、このような語彙による区別が、つねに文法による識別を伴っていることである。ちがう語彙を使うから文法上の区別はもう必要がないということではなく、むしろそれとは逆で、このように語彙による区別を行っても依然として、不定冠詞／複数形語尾の有無による名詞の意味文法論的識別は不可欠であって、これはすべての名詞に等しく適用される義務的なものだということである。たとえば、

(3) a. We'll kill ***a*** *pig* and give a feast.〔'a—ϕ' 形〕「豚」
　　b. Muslims do not eat *pork*.〔'ϕ—ϕ' 形〕「ブタ肉」

(4) a. 'two New Zealand *lambs*'〔'ϕ—s' 形〕「2頭の子羊」
　　b. 'two pounds of New Zealand *lamb*'〔'ϕ—ϕ' 形〕「子羊の肉2ポンド」

(5) a. ***A*** *horse!* ***a*** *horse!* my Kingdom for a horse!—*Richard III*〔'a—ϕ' 形〕「馬をひけ、馬を。俺の国をくれてやるぞ」
　　b. I'm afraid this isn't *beef*. It's *horse*〔'ϕ—ϕ' 形〕「牛(ギュウ)肉」「馬(バ)肉」

のように、'(a) lamb' や '(a) horse' などの場合は、'a—ϕ' 対 'ϕ—ϕ' という syntactic distinction だけで個体と量状の識別が示されているが、'a pig' vs 'pork' などの場合は、さらにその上に lexical distinction が、いわば余剰的（redundant）に二重に追加されている。対象となる動物によってこのように違いが認められることは、その言語社会の食習慣を反映していて、食の文化史といった観点からみて非常におもしろい。英語言語の社会では、馬や犬を食べる習慣はない。鯨にもその習慣はない。食用のために解体された状態のものを表す単語が、特に用意されていないことがこのことを裏付けている。

日本語の場合はどうか。日本語では「肉（ニク）」の前にそれぞれの動物名をつけて区別し、別の独自の単語をもつものはない。わずかに「かしわ」にその痕跡が認められるだけである。しかし動物名を「肉」の前につける場合、そのつけ方に3段階あるように思われる。まず「鹿の肉」「羊の肉」などは、「猿の肉」「猫の肉」などと言うのと同じで、どの生き物にでも通用する一般的な句表現であって独立した一つの単語ではない。他方、「の」抜きの場合でも、動物名が「ギュウニク」「バニク」のように音読みの bound morpheme 的なものと、「ブタニク」「トリニク」などのように訓読みの free morpheme 的なものと、同じ複合名詞でも2種類あるように思われる。後者の場合、「トリの唐揚げ」「ブタ／イカ／エビ」（お好み焼きの種類）のようにも使えるが、前者の場合、「ウシニク」「ウマニク」とはちょっと言いにくい。ましてや「ウシ」「ウマ」そのままでは牛や馬の姿がちらついて気持ちがわるい。

	①	②	③	④
動物名	ニワトリ	ウシ、ウマ	ブタ、（ニワ）トリ	ヒツジ、シカ、イヌ…
食肉名	かしわ	ギュウニク、バニク	ブタニク、トリニク	ヒツジ／シカ／イヌ…のニク

しかし最近は、「ビーフ」「チキン」「ポーク」「マトン」「ラム」などの言い方もよく耳にする。これらは①のレベルの食肉語彙と位置づけることができるかもしれない。日本人の食習慣も着実に変化していることの証拠であろう。

3．個の解体

話を不定冠詞に戻そう。英語の場合、個としての形をもつ生きた動物のあいだは 'a—ϕ' 形を用いるが、それが解体され個としての形を失い食肉になると同時に、形も 'ϕ—ϕ' 形になる。用いられる名詞が同じであろうと別の名詞であろうと、関係はない。個としての形を失うと同時に不定冠詞 a／an も失うのである。逆に言えば、不定冠詞の喪失が、個としての形の喪失を表示する。

(6) a．You have *egg* on your chin. —— R. A. Close

b．That girl has got *banana* all over her dress. —— Keene *et, al.*

日本語では「タマゴ」「バナナ」でいいが、これをもし間違えて 'an egg' 'bananas' などとしようものなら、コブ取り爺さんよろしく、タマゴが丸ごと一つごっぽりと頬にくっ付いていたり、バナナがふさふさと付いたバナナ服（？）を着ていたりすることになる。ここでは半熟タマゴの黄身が口もとにべっとりと付いていたり、食べそこねてくちゃくちゃになったバナナがお洋服のそこら中に付いていたりするのである。落とせば割れる丸いタマゴは調理されて量状の物質に姿を変えており、皮をむかれ咀嚼されたバナナには弧を描く元の姿はない。この個体

性の喪失が不定冠詞や複数形語尾の喪失によって、すなわち、ゼロ冠詞、ゼロ・ナンバーとでも言うべき文法標識によって示されている。

(7) It's suffocating upstairs. I made a grape drink for George. He always liked *grape*.
—— *All My Sons*

ジョージの好きであったのは果物のぶどう（grapes）ではなくて、そのぶどうをミキサーにかけて作ったジュースである。個としてぶどうは形を失い、液状のジュースに姿をかえている。それが 'ϕ—ϕ' 形の 'grape' が示している意味である。

このような用例なら日本語母語話者にとっても理解は容易である。個としての形の喪失は、幼児にも認知可能な日常の体験であるからである。しかし次のような用例になると、ちょっと頭を働かさなければならない。

(8) a. You'll get plenty of *sun* in Portugal. —— Cook *et al.*
b. There's too much *piano* and too little *orchestra* in Grieg's concerto. —— *ibid.*
c. Should I sign this paper in *pencil* or *ink*? —— *LDCE*

最初の用例では、'sun' は空に輝く日輪ではなく、そこから発せられる太陽の光である。水を浴びるように身体に浴びる日光である。'sun' は、ここでは 'water' と同じ量状名詞であり、同じ様態の存在である。そして 'ϕ—ϕ' 形がそれに呼応した文法形態である。2番目の用例も同じで、'piano' 'orchestra' は、個としての形やまとまりをもった楽器、楽団ではなく、それらによって作り出される音楽(music)であり、その寡多に関心がある。それは much／little で修飾される量状の存在である。最後の用例は特に注意をひく。ここでは 'pencil' も 'ink' と同じ 'ϕ—ϕ' 形で表示され、インキと同じ存在様態のカテゴリーに識別されている。形をもった筆記用具としての鉛筆ではなく、こすると黒く手につく鉛筆の芯、その材料の黒鉛のことである。同じ量状の素材として、液状のインキと同じカテゴリーに指定され、前置詞も、道具を示めす with ではなく、材料を示す in である。この相関は注目に値する。

このように考えてくると、なぜ「英語で」と言うとき、

(9) Can you make yourself understood *in English*?

のように 'in English' と言うのか、納得がいく。この 'English' は、'ink' と同じ量状名詞であって、素材、材料という認識において本質的に変わりはない。その点で、特定個別言語としての 'the English language' とはまったく別の認識である。それはちょうど 'language' にも、

(10) a. Speak *in* simple *language*.
b. The definitions are *in* straightforward non-technical *language*.

のように、絵画における絵具というか、表現の素材として、'ϕ—ϕ' 形で前置詞 in と用いる用い方があったのと同じである。

4．個の埋没

これまで個の解体という観点から、不定冠詞とゼロ冠詞の関係をみてきたが、これだけでは不定冠詞の意味機能を十分に理解することはむずかしい。個としての形の喪失は、何も物理的な個体の消滅ばかりではないからである。たとえば、'language'「言語」の場合、現実に存在しているのは日本語、英語、ロシア語といった個別の言語であって、個別特定の言語に属していない言語はない。しかしその個別性を消去あるいは超越して、人間の言語一般について考えてみようとするとき、そこに現われるのは意志疎通、思想•感情の表現「手段」(means) としての——「道具」(instrument) ではない——素材量状の存在であり、そのことは前節においても述べたとおりである。この存在様態の認識の違いが、たとえば

(11) In that sense this essay is not in general about *languages*, French, English or Swahili, but is about *language*. —— J. R. Searle

のように、'ϕ—ϕ' 形あるいは 'ϕ—s' 形の選択となって表現される。それはちょうど、髪の毛や草の葉が

(12) a. You have ***a*** *hair* on your collar. I will take it off.
b. The cat has left her loose *hairs* all over my clothes. —— *LDCE*
c. A lizard slid swiftly between her feet and disappeared away among the *grasses*.
—— M. Spark

では、個として一本々々が不定冠詞形、複数形で眺められているが、

(13) a. He has a friendly face and short *hair*.
b. 'land covered with *grass*'

では、頭に生え揃っている毛髪、地面を覆っている草や芝として 'ϕ—ϕ' 形で表現されるのと変わらない。一本々々、手にとるように櫛があてられていても、やはり理髪屋さんの床にちらばる毛の塊、そして羊毛 (wool)、綿花 (cotton) と変わらない量状の存在なのであり、その中に個は埋没し形を失っている。

そしてまた次のような場合はどうであろうか。

(14) Houses, ships, and furniture are made from *timber*.

と言えば、この 'ϕ—ϕ' 形の 'timber' は「木材、材木」のことであり理解しやすいが、

(15) Half of his land is covered with *timber*.

と言えば、これは growing trees のことである。ただそれがここでは、自然の資源として、建築の資材として眺められているということであろうか。個々の立ち木 (standing trees) は、全体の集まりの中に形を失い、一面の量状の広がりの中にその姿を埋没させているのだが、ここでは先の 'hair／hairs' 'grass／grasses' とは違い、 'timber／trees' のように、語彙による区別を、文法形態による弁別の上にさらに付け加えている。

同様のことは 'furniture' と 'beds, chairs, tables, etc.' の間にも認められる。現実の個々の存在としては「ベッド」であり、「椅子」「テーブル」などであるのだが、もろもろの家具の集まりの中に、個としての形を埋没させ、個としての形を消している様態が、 'φ－φ' 形の量状名詞 'furniture' のありようである。「家具」と言えばすぐに5点セットなどと、テーブルや椅子などを思い浮かべてしまう日本語母語話者にとって、このような存在の様態弁別は、特別な学習なしでは習得はとてもむずかしいことであろう。

5．万物流転――個の誕生と消滅

これまでは、個の解体、個の埋没といった観点から不定冠詞／複数形と量状名詞との関係をみてきたが、もちろん、逆の方向からその関係を把えることも大切であろう。固有の姿・形をもたない物質・素材が、自然の力により、また人間の力により、

(16) 〈'φ－φ' 形〉　　〈'a－φ' 形／ 'φ－s' 形〉
- 'copper'「銅」 → 'a copper／coppers'「銅貨」
- 'glass'「ガラス」 → 'a glass／glasses'「グラス」
- 'iron'「鉄」 → 'an iron／irons'「アイロン」

のように個としての形を獲得すると同時に、不定冠詞あるいは複数形語尾を獲得する。不定冠詞／複数形語尾は、いわば個体性の付与獲得を示す標識である。

日本語ではそれぞれ別の単語が用意されているが、英語では、同じ名詞の「活用変化」により、個体性に関するカテゴリー異動として表現される。そしてこれは、単に同一単語の多義化を文法形態の面から支援するだけでなく、個としての形を持つか持たないかという、存在の根底にかかわる弁別を表示するものでもある。だからこそ、この「±個体性」という識別は、すべての名詞に例外なく適用されるものであり、そこに不定冠詞／複数形語尾の、文法的形態素としての重要性、有用性がある。

(17) 'a mink φ'〔自然によって形を与えられた生き物としてのミンク〕
'φ mink φ'〔人間によって解体され個としての形を失った、素材としてのミンクの毛皮〕
'a mink φ'〔人間によって個としての形を与えられ、製品となったミンクのコート〕

(18) 〈用紙〉 'paper'〔'ϕ—ϕ' 形〕
〈印刷・製本→＋個体性〉
'newspapers' 'magazines' 'books' etc.〔'ϕ—s' 形〕
〈量状集合→—個体性〉
'printed matter'〔'ϕ—ϕ' 形〕
〈裁断・溶解・再生→—個体性〉
'paper'〔'ϕ—ϕ' 形〕

(19) 〈木材〉 'wood' 'timber'〔'ϕ—ϕ' 形〕
〈製造・加工→＋個体性〉
'chairs' 'tables' 'beds' etc.〔'ϕ—s' 形〕
〈量状集合→—個体性〉
'furniture'〔'ϕ—ϕ' 形〕
〈解体・分解→—個体性〉
'wood' '*pieces of* wood'〔'ϕ—ϕ' 形〕

形(色)あるものは滅して無(空)となり、無(空)はまた形(色)を得て世に現われる。不定冠詞／複数形とゼロ冠詞ゼロ形による名詞の変化・識別は万物流転、人の世の理りを映し、普遍的な宇宙の原理を顕わしていると言えば大袈裟だが、そうであればこそ、この弁別が英語にとって不可欠の、基本的な意味形態の識別となったのであろう。

6．英語不定冠詞の発達

われわれ日本語で生まれ育った人間にとって厄介なことは、英語では名詞はすべて、その使用に先立ってまず ＋individual (countable) か —individual (uncountable) か、どちらのカテゴリーで使うか決め、それを不定冠詞／複数形語尾、ゼロ冠詞ゼロ形によって標示しなければいけないことである。辞書に載っている見出し語のままの形ではだめで、±個体性の識別という付加価値をつけて初めて、発話の中で正しく使うことができる。これは、発信側の話し手／書き手の負担となるが、聞き手／読み手にとってはそれだけ意味の decode が迅速正確になる。負担になるとは言っても、名詞の前か後で〔ə〕とか〔z〕とか言うだけで、労力的にはたいした苦労ではない。しかもそれによって、その名詞に関わる基本情報が洩れなく伝達されるとなれば、こんな効率のよいことはない。だからこそ、ラテン語にはなかった不定冠詞などというものが、時代を経てその方言のフランス語やスペイン語などにも発達してきたのであろう。そして英語の不定冠詞は、フランス語やドイツ語の不定冠詞に較べて、一歩も二歩も先んじていると言えるのである。

フランス語やドイツ語では、不定冠詞は依然として数詞の1と変わりなく、

(20) ‘un mouton’〔œ̃ mutɔ̃n〕（＝a shecp）
‘une personne’〔yn pɛrsɔ̃n〕（＝a person）
‘ein Wort’〔ain wɔ:rt〕（＝a word）
‘eine Schwein’〔aine ʃwain〕（＝a swine）

と、‘a sheep’ なのか ‘one sheep’ なのか、‘a word’ なのか ‘one word’ なのか、耳で聞けば発音の強弱などによって聞き分けられるのかも知れないが、その境界ははっきりしない。（日本語の「イチ、ニーのサン！」は、フランス語では「アン、ドゥー、トロワ！」‘Un, du, trois!’、ドイツ語では「アイン、ツヴァイ、ドライ！」‘Ein, zwei, drei!’ である。）その点、英語の不定冠詞は、皮肉なことに、ノルマン・フレンチによる長い支配のお陰でさらに一段階、他の言語より進化しているように思われる。

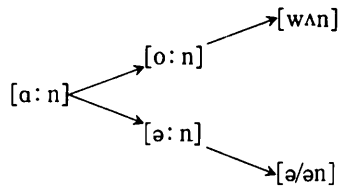
英語でも古英語の時代には、不定冠詞はまだ完全には数詞の１から独立しておらず同じ語形で、Bradley（1904：68）の用例では、

(21) hē hœfth ānne man ofslœgenne
（＝he has a／one man slaughtered）

のように、後置された過去分詞 ‘ofslœgenne’ ともども、目的語の ‘man’ に合わせて、‘ānne’ と男性形対格（masculine, accusative）に活用変化して用いられている。この活用語尾が、中期英語の時代に徐々に脱落していき、さらに活用変化語尾の母音発音に続いて末尾子音〔n〕も脱落して現在の不定冠詞になった。ただ母音発音の前では、‘a apple’〔ə ǽpl〕のように母音の連続発音（hiatus）が生じ、かえって発音に手間どるので、それを避けるため ‘an apple’〔ənǽpl〕と、ここでは昔の形が残っている。（シェイクスピアの時代には、現在の〔mai ɑ́:rm〕（‘my arm’）も、〔n〕音を保存して〔mainɑ́:rm〕（‘mine arm’）のように発音されていた。）日本語でも、「試合」「場合」を「シヤイ」「バヤイ」、「顔」「頬」を「カホ」「ホホ」のように発音することがあるのと同じである。日本の学校では、a と an について、「母音の発音の前では、n をつけて an になります」と教えているが、これは歴史的には、「母音の発音に続く場合以外は、an の n の発音は落ちます」というのが正しい。いずれにしろ、綴りからばかりでなく、もっと発音の面からの指導が望まれる。

このような不定冠詞の発達と並行して、英語では、数詞の１も、それに匹敵する形態変化を遂げたことは興味がある。それによってお互に、独自の意味領域と文法機能の確立にしのぎを削ったということであろう。

(22)



古期英語の数詞 ān は、中期英語で on／oon、そして one へ。only や alone にその跡が残っている。発音も、シェイクスピアの頃はまだ前置詞の on と変わらぬ発音で、次のような pun が可能であった。

(23) *Speed* . Sir, your glove.
Valentine. Not mine ; my gloves are *on*.
Speed . Why, then, this may be yours, for this is but *one*.
—— *Two Gentlemen of Verona* II, i ,1-3.

現在の〔wʌn〕の発音については、方言に由来すると言われているが、意味の強調がもたらした語頭発音の強化と考えればよい。日本語でも、普通の笑い声の「ハハハ」が「アッハハ」に、そして豪傑笑いの「ワッハッハッハ」に、またライオンの咆吼を「ウォー」とし、人を驚かすときに「ワッ」と言うのに似ている。

もちろん、このような数詞の one の発音の強化、語形の変化は、もう一方の不定冠詞のほうの機能・形態の発達変化と対応するもので、従って英語の不定冠詞 a／an は決して「1つの」という意味を表わすためのものではない。そのような lexical meaning を捨て、±individual の弁別、count／mass の名詞カテゴリーの識別という syntactic function を担うためにこそ英語不定冠詞は発達してきたのである。そして数詞 one の方も、特に取り立てて「1つの」という意味を表すために、現在の形にまで変わってきたのである。

(24) a. *A cow* has horns. (牛には角がある)
b. *One cow* has horns. (The others don't)

が同じ意味だなどと誰が言うであろうか。

(25) a. *A boy* cannot lift it. (But a man can.)
b. *One boy* cannot lift it. (But two boys can.)

(26) a. Let's take *a taxi*. (Not walk or go by bus.)
b. Let's take *one taxi*. (Not two taxis.)

不定冠詞 a／an には不定冠詞 a／an の、数詞 one には数詞 one の働きがあればこそ、同じ根から出発しながら、ここまで別箇の形を発達させてきたのである。

7．不定冠詞に求められた機能は何か

ラテン語は不定冠詞を発達させる前に、イタリア語、スペイン語、フランス語などの方言に分裂分化してしまい、みずからは死語になってしまったので、不定冠詞に関しては、いわばpre-developingの段階で終わったと言える。他方、フランス語やドイツ語は、不定冠詞を発達させてはいるが、形態的にも、数詞'un''ein'から十分に分離独立したとは言えず、あえて言えばdevelopingの段階であろうか。英語の不定冠詞も、古期英語の頃は数詞ānとはっきりと区別のつかないものも多かったが、現在は形態的にも機能的にも、不定冠詞a／anと数詞oneに截然と分かれている。fully developedの段階と言ってよかろう。そして英語母語話者が不定冠詞に求めたものは、1つと数えるに先立って、それに必要な、1つと数えることのできる存在様態の認識とその表示の標識である。すなわち、数詞oneを用いて1つと数えるためには、まずそのものを、数えることのできる個体として認識することが必要であり、個と認めて初めて1つと数えることができる。このような数詞oneのcounting機能の基礎的前提となるcountable individualityとその認識表示こそが、不定冠詞に求められた機能であった。数詞oneの底辺部分におけるこの個体認識、これに価値を認めて、それの識別表示の標識として数詞oneから別に分離独立して発達してきたのが不定冠詞である。

(27)

a being ⟶ 〔countable〕 ⟶ counting：'one'
　　↘ individual：'a／an'

これはちょうど、指示詞thatからの定冠詞theの分離独立の過程と相似する。ある「遠」存在を指さし行為によって指示するためには、まずそれが同定可能な存在であるとの了解がなければならない。そのような了解が成立していないところでは、thisもthatもないからである。指示詞thatは、このようなidentifiableな存在の存在を基礎的な前提として特定者指示の行為を遂行するのだが、その指さし行為よりも、それを支えるidentifiabilityの素性の表示に、より多くの関心をもつのが定冠詞である。この動機により、定冠詞theは指示詞thatから分離独立して発達してきたと言える。「このものは同定可能なるがゆえに確認同定せよ」、というのがそのメッセージである。

(28)

a being ⟶ 〔identifiable〕 ⟶ pointing：'that'
　　↘ to be identified：'the'

英語の不定冠詞は、数詞oneから生まれ、数詞oneの意味を出発点としながらも、その意味機能は数詞oneとは完全に異質のものである。その生長、発達が目指した方向は、複数形語尾を補完する単数個体の標識表示であった。個としての固有の姿•形にしろ、個としての塊まり、

まとまりの観念にしろ、その有無の識別によって名詞概念を±個体性に二分して考えること、そしてそのための文法標識の創造・完成にあった。count／mass の名詞の区別も、countable／uncountable の識別も、結局は、複数形語尾と協力補完の関係にある不定冠詞の確立を俟って初めて成立する名詞の意識概念区分であった。

(29) a. Mind you don't catch *cold*.
　　b. He had **a** bad *cold* in the nose.

(30) a. *War* broke out at the beginning of her first term at the training college.
　　b. There's going to be **a** *war* in Europe. —— M. Spark

(31) a. This table takes too much *room*.
　　b. I want **a** *room* with a view.

(32) a. When *morning* came, Mr. Gregg was the first to wake up. —— R. Dahl
　　b. To get on that subway on hot *mornings* in summer. —— A. Miller

(33) a. *Word* came of his success abroad.
　　b. We exchanged a few *words*. —— *LDCE*

状態としての風邪や戦火に対して出来事としての鼻風邪や戦争、広がりとしての容積空間に対して囲われた空間としての部屋、状況としての朝に対して一日の中の区切られた時間帯としての朝、巷に流れる噂としての量状の語に対して、一語々々切り離された単語——不定冠詞とゼロ冠詞による個体性の有無の表示、そしてそれにもとづく概念存在のパラダイム化が、すべての用例に一貫している。このように、英語の不定冠詞の生成発達の過程は、数概念の one からの脱却に始まり、名詞の概念存在の individuation へと向かう、新しい文法機能獲得への道であった。これにより不定冠詞は、既存の複数形語尾による名詞の語義概念の individuation を補完し、文法による名詞語義の範疇化——±individual の識別による——を完成させたものと言える。

8. a／an が one と同義に思われるとき

このように不定冠詞は、現在では数詞 one とは完全に異なる文法カテゴリーに所属し、英語の冠詞システムを形成する重要な文法標識となっているが、そのルーツはもちろん数詞の ān（＝one）であり、a／an と one は、言ってみれば同根異種の関係である。だから、限りなく one に近い意味で使われている a／an があることも当然で、そのために、「a／an は1つのという意味です」という説明が出てくることになったのであろう。

(34) a. 'in *a day* or two'（1日か2日で）
　　b. In *a word*, no.（一言（ひとこと）で言えば、ノーです）

a．では、確かに不定冠詞 a が数詞の two と並んで用いられており、数詞 one と変わらないようにみえる。b．も、日本語に訳すとなると、「一言」のように 1 を使わざるを得ない。

しかし、これは日本語に不定冠詞がないので、便宜的に「一日」「一言」と訳しているだけで、'in a sense' だと「ある意味では」が定番の日本語訳である。また、「一日か二日で」という日本語は、'in one or two days' とも英訳できる。こちらは一も二も数詞を用い、不定冠詞は使っていない。ここでは明らかに数の表現に焦点があるのであろう。だから、'in a day or two' などの場合、形態も機能も数詞 one とは異なる不定冠詞 a を使っているということ自体が、数詞から冠詞への最後の境界を超えていることの証明であって、「1 つの」という数の強調でなく、やはり＋individual の意味カテゴリーを示す文法標識として用いられていると考えるのが筋である。そう思ってみてみると、'or two' なしの表現も随分と多いことに気付く。

(35) a．I'll be there in ***a*** *minute*, Doc. —— *Come Back, Little Sheba*
b．In ***a*** *week* the money will be all finished. —— L. A. Hill

a．では、夫のドックに向かって 'in a moment' 'in a second' とはいかぬが 'in an hour' ではない、'in a minute' でそちらに行くからね、とローラは電話で言っているのであり、b．では、そんなお金、'in a month' どころか 'in a week' でどこかに消えてしまうさ、と農家の親爺が画家に向かって言っているのである。焦点は「分」「週」という時間の単位にあって、1 分とか 2 分とか、一週間とか二週間とか、その数（かず）にはない。その点でこの表現は、次の用例にみられるような不定複数形と同質の相互補完的なものである。

(36) a．Besides, this is the first time you've been together in *months*.
（それに何ケ月ぶりかなんでしょう、こうやって二人顔をあわせるのは）
b．The house hasn't looked like this in *years*（お家がこんなにきれいにみえるのは何年ぶりでしょう）
—— *Come Back, Little Sheba*

日本語はこのような、＋individual、＋plural の表現はないので、日本語に訳すとなると、「何年ぶり」「数年ぶり」「幾年ぶり」のように、複数を示す言葉を別に補わなければならない。英語にはこれに当たるような言葉は使われていないのであるから、発話の焦点は、やはり時間の単位名詞にあって、それが複数であるということは言わば副次的な選択である。

話を 'in a day or two' に戻せば、この 'a day' も基本的には今述べた 'in a minute' 'in a week' と変わりはない。'in a day' と言ったあとに、用心のため 'or two' と付け足したのである。

(37) Let me enlighten you on *a point or two*, baby. —— *A Streetcar Named Desire*
(38) Blunt said nothing for *a minute or two*. —— *Roger Ackroyd*

など、他の前置詞でも用例は多い。実際のところ、a／an は冠詞の体系に属し、one は数詞の体系に属しているのだから、先の用例(24)～(26)で示したように、その意味機能、文法機能が違っていて当然である。そういえば、Quirk et al. (1972：929) も、

(39) a. 'a YÈAR or two'
b. 'ÒNE year or TWO'

と tone mark を付け大文字を用いてその発話の焦点の違いを示していた。数詞はそれ自体の語義をもつ辞書的語彙であるのに対して、英語の冠詞は、あとに続く名詞の意味カテゴリーの枠組みを示す文法標識である。日本語にはこのような、名詞の意味を体系的に識別分類する文法習慣がないので、上例(39)のような場合、a.も b.も「一日か二日」と訳しているだけであって、それで、不定冠詞が「1つの」という意味であると証明されたことにならないことは言うまでもない。日本語の訳でもって英語の文法の説明に代えることは、厳に慎しまねばならない。

References

Abbott, E. A. (1844). *A Shakespearian Grammar*. London: Macmillan.

Baugh, A. C. and T. Cable (1978). *A History of the English Language*, third edition. London：Routledge & Kegan Panl.

Bradley, H. (1904). *The Making of English*. London：Macmillan. Revised edition, 1967. Seibido edition with notes by Otsuka, 1970.

Close, R. A. (1981). *English as a Foreign Language：Its Constant Grammatical Problems*, third edition. London：George Allen & Unwin.

Cook, J. L., A. Gethin and K. Mitchell (1974). *A New Way to Proficiency in English*. Oxford：Basil Blackwell.

Keene, D. and T. Matsunami (1962). *Problems in English：An Approach to the Real Life of the Language*. Tokyo：Kenkyusha.

織田　稔 (1982).『存在の様態と確認――英語冠詞の研究』東京：風間書房.

――― (1990).『英文法学習の基礎』東京：研究社出版.

――― (1994).『直示と記述同定――英語固有名の研究』東京：風間書房.

マーク・ピーターセン (1988).『日本人の英語』東京：岩波書店

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik (1972). *A Grammar of Contemporary English*. London：Longman.

――― (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London：Longman.

Thomson, A. J. and A. V. Martinet (1986). *A Practical English Grammar*, fourth edition. Oxford：Oxford University Press.